

道博協ニュース

第61号

発行 平成10年(1997)2月25日
発行所 北海道博物館協会
事務局 北海道厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館内
電話 011-898-0456
FAX 011-898-2657

第二回北海道博物館協会

ミュージアム・マネージメント研修会を終えて

第二回の北海道博物館協会

ミュージアム・マネージメント研修会を、平成九年十一月二十八日、札幌市の北海道開拓記念館を会場として、全道から五十四名の参加者を迎え開催しました。

このミュージアム・マネージメント研修会は、平成八(一九九六)年三月にまとめられた「北海道博物館協会基本問題検討委員会報告」の中で、研修事業の充実、特に館長及び事務職員の博物館経営に関する学習機会の充実を図ることの必要性の指摘を受けた、平成九年度事業の一つで、今回は昨年に続き第二回目の開催となります。

なお、この研修会は、北海道教育委員会主管の平成九年度生涯学習推進事業「生涯学習振興奨励補助金の交付を受けて実施したものです。

趣 旨

今、物質的な豊かさよりも精神的な豊かさを求める時代になり、また、個人は個人の欲求を個性ある手段で満たすことを願っています。人々が自らの要求によって学習する時代の中で、博物館は人々の欲求を的確に捉えて日々の事業の展開に反映させる必要があります。

内 容

このような背景のもと、ミュージアム・マネージメントのあり方を考える上での一つの重要な要素である博物館におけるマーケティングの意義と手法について考えます。

研修会は、講演二題と、それらを受けての質疑応答を行いました。講演の演題、講師は以下のとおりです。

講演 一 「イギリスの博物館における教育活動とマーケティング活動の現状」京 都外国語大学国際文化資料室 非常勤講師 西山弥生氏

講演 二 顧客のファン

道央ブロック博物館等連絡協議会(仮称)の設置に向けて

北海道博物館協会の基本問題検討委員会報告でも検討課題になっている「博物館ネットワークの確立」は、既に設置されている道北地区(上川・留萌・宗谷)、網走管内(網走)、道東三管内(十勝・釧路・根室)、道南プロ

ク(渡島・檜山)の四地区は、それぞれの地区で、活発な活動を行っています。さらに、平成九年には、日胆地区博物館等施設連絡協議会(日高・胆振)が設立され、五地区となりました。

最後に残ったのは、道央ブロック(石狩・後志・空知)で、総会、役員会でも懸案事項となっていました。現在、担当役員(石狩地区・安藤副会長、三野理事、後志地区・本間理事、空知地区・青木理事)を中心に、平成十年度設立に向けて着々とその準備が進められています。

設立の折には、該当地区の館・園には、積極的な加入をお願いいたします。

化」(株)東芝コンセプトエンジニアリング開発部生活文化研究担当グループ長 赤羽俊男氏

司会・進行 苫小牧市博物館館長 佐藤一夫氏

また、講演の概要は、本誌二頁以降に掲載しています。

なお、生涯学習振興奨励補助金交付の事務処理のため、テロップおこしを行い道教委に提出する「事業報告書」を作成しましたので、希望する館・園は、事務局に連絡して下さい。事業報告書をコピーしてお送りいたします。

(事務局)

講演一

「イギリスの博物館における教育活動
とマーケティング活動の現状」

京都外国語大学国際文化資料館

非常勤学芸員 西山 弥生 氏

イギリスの博物館における教育活動とマーケティング活動の現状という事をお話いたします。

一方で有料の博物館では、二三年前入館者が減っています。これはイギリスの博物館で入館料を徴収するという事は、博物館してみれば死活問題な

一九九五年のデータで、だいぶ古くなりますので、今回はデータそのものでなく、手法というところに着眼点を当てて話を進めます。イギリスの中では博物館が大体二千二百五十館あります。イギリス人の四〇%の大人は一年に一回、四〇%は時々通う、二〇%はめったに行かないといふふうに調べられております。イギリスには十九の国立博物館があるのですが、年間およそ三千三百万人の入館者があり、博物館全体で一億一千万人の入館者が年間見込まれているという事です。そして一九八七〜九四年度までに限っ

て言いますと、無料の博物館に訪れる来館者は、三四%増えています。これはイギリスの博物館で入館料を徴収するという事は、博物館してみれば死活問題なだけで、入館料を取っているだけで博物館に行くのは止めようと思える人が未だに多いという事は確かです。サイエンスミュージアムは、一九八八年に入館料を徴収いたしました。原因は、大英博物館等の無料の博物館に行ってしまうことです。イギリスでは八〇年代から積極的にマーケティングを導入していますが、必ずしもそ

れを導入する事で、入館者が多くなったとは限りません。博物館でマーケティングを積極的に行った事によって、入館者離れが始まったところもあり、今まで博物館に足を運ばなかった方まで来てくれるという事が起こったり、一概に、マーケティングを導入した事によって、全てが良い方向に動いた訳ではありません。マスコミもだいぶ批判的でしたし、博物館の職員の中にもとても批判的な対応がありました。

また、マーケティングには、四つのPと言われているプロダクト（博物館そのもの、展示等の商品）とプレイス（博物館が何処にあるか）とプロモーション（広報活動）が必要だといわれています。では、一般の公立博物館ではどのようなマーケティングをやっているかという事で、マーケティングのリニューアルオープンに向けての事例を取り上げたいと思います。

まず民間のリサーチ会社が街頭のほうに出まして、多量のサンプルを集めたところ、例えば、なぜ博物館に来ないのかという問いには、①面白くない、②関心がない、③知らない、という結果が出ました。こうした結果をリニューアルオープンの際の参考にしました。



むという方法です。ベンチにはどれくらい座っているのか、ベンチでただ座っているだけだったからカウントしないんですけど、ベンチで、例えば十一番のディスプレイを見ている場合には、ストップウォッチを押して記録していくという大変手間のかかる調査です。

一日の内でも朝来る客と夕方来る客では違いが出るかも知れませんが、平日と休日とを分けて一日に五〇組ずつ取っていくという形を取りました。

調査の結果、一番人気の高いのは、トラインクオンマンクと言って、自分でマスクをかぶって鏡で見れるものでした。そして、一番最初の、入ってすぐにある、フェイスイズオブアミングアモンタージュという写真があります。パームガムには白人だけではなくて、中国系の人や黒人の人もいますので、いろんな人の写真が置いてあって、触ったり、モニタージュですから顔をちょっと変える事が出来、とても人気があるということがわかり

ました。また、最初に展示してあるエントリーインフォーメーションパネルは、凄く人氣がないという事がわかりました。

また、おもしろい事に、この展示の配置で、みんなドアだと思っただけで、間違えて出て行くという人が多い場所がありました。そこは、目隠しをしたほうがいいんじゃないか、というのでも出ましたし、あまりにも見てくれない展示物があるの、それを注意を引くように配置換えをしました。

調査の結果はたくさんありますが、どれだけ多くの来館者が、どの展示に多く立ち止まってくれたか、動線の問題等々、博物館のマーケティングに参考となるべき点が多く抽出することができました。さらに、学校教育と連携をしていますので、先生にあらかじめ来ていただいて、展示を見て評価してもらったり、下見を必ずしてもらったりして、どこが使い易いか、使い難いかということもやっております。

マーケティングリサーチを行う時には必ず、「何を知らたいか」と「リサーチ結果をどのように反映させていくか」と定義づけをします。そして

講演二

「顧客ファン化」

東芝コンセプトエンジニアリング開発部生活文化研究担当

グループ長 赤羽俊男氏

それを館内に閲覧し、職員全員のコンセンサスを取ってからリサーチを行うことが大切なことだと思います。

博物館のマーケティングについては、国立博物館がおやりになった時に、はっとしたんですが、実はこのテーマというのは、我々も十年來のテーマなのです。ようするに、お客様が物を買ってくれない、そして、お客様が顔が見えない、そういう状況が昭和六十二年頃からはじまりました。我々はメーカーですから、物を作って買っていたら、物を作らない。従来ですと、供給側の論理で全て物事が終わっていました。しかし、供給側の論理では、もう企業はやっていけません。

博物館のマーケティングにしろ、生活者にとってどうするかということ、すなわち生活者の価値観とか、意識の変化を見る、というのが昭和六十二年ころから始まりました。私は、会社に入ってから二五年なるんですが、五年間冷蔵庫をやっていました。入った時は一ドアの冷蔵庫から二ドア冷蔵庫に移行する時期でした。そのころは、二ドアの冷蔵庫をお客さん

に配ってあげる、という様なお客さんに対して非常に失礼な事をやっても売れました。ところが、昭和六十二年頃から売れなくなった。ようするに、お客様が変わった、求める価値が違ってきたのです。冷蔵庫の延長で冷蔵庫を考えるとダメだという考え方なんです。

その時期どういう事をやったかという、冷蔵庫は保存庫でなく調理庫という事でコンセプトを考えるとどうなるかということ。その頃、単身赴任が一般的になり、奥さんが一週間に一回身の回りの世話をしに来、冷凍庫に、月



講演



曜日、火曜日、水曜日というふうにメッセージを入れて、電子レンジで調理出来るような素材を作っていく。まさに、冷蔵庫を売るのではなくて、生活価値を売ろうと変えたわけです。そうすると、冷蔵庫の作り方がどう変わるかという、機能競争から生活競争になったのです。それに遅れたメーカーは、機能は良くても価格で勝負され、なかなか

競争に勝てなかったという事実が実際にありました。この様に、とにかくお客様は変わるんだという事を、今日はここで言いたいわけです。マーケティング戦略というのは、基本的に人です。人を見ないと絶対にわからない。しかし、人は物を言いません。ですからそこが大事なところ

です。仮説を設定して、それを何らかの検証をしなければならぬ。それなりに思いこんで、マーケティング戦略を展開していくという考え方は、最近のマーケティングの言い方はマネージャールマーケティング、つまり経営戦略そのものだという人もいます。

顧客について数点お話しします。第一点は顧客との関係づくりを大切のすること。二点目は、顧客を選ぶという考え方には基本的には立つべきである。そのためには、どういう価値を提供できるかという事です。三点目は、商品の概念、コンテンツが大切なことだと考えております。また、顧客満足という点で言えば、「ブランド」というのが非常に重要なキーワードになります。商品で見ていると、例えば機能・性能等様々な要素でブランドが成り立っていますが、その商品名だけでそのものが思いつかべることができる。そうしたブランドというものを作るといのは大事な事です。ブランドの

高い商品は、お客さんから見ると付加価値が高い商品となります。また、企業側から言えば「ブランドは資産」となるのです。逆に、顧客はブランドスイッチを頻繁に起こしますので、ブランドスイッチしない商品を顧客に提供しなければなりません。ブランドスイッチしない理由は、気に入っているという事です。そのためには、例えば、クレーム処理を活かして次の商品開発に活かす。クレームの中にビジネスチャンスがあるわけです。競争をしている家電業界において、「指名買いにつながる競争優位を実現する戦略的課題」を探ることが大切です。「顧客のファン化」とは、「同じ消費者から継続的に購買してもらうこと、つまり、リピート購買していただくこと」と定義しておりますが、家電業界の分析の一端を博物館に置き換え、それぞれの立場でかみ砕いてご活用いただければ幸いです。

ある電機メーカーは、目線で考えた非常にいい商品を出しています。ただ残念ながら、「ブランド力」という意味で一段下がると、それが価格に転化される。単に良いものを

作れば良い、という事ではなくて、ブランドをどう付けていくかという事が非常に重要な事です。しかし、ブランドはすぐ損なわれます。ブランドはプラスの資産とマイナスの資産があります。永遠と築いてきたそのブランドが、ちょっとした事を機に負の資産になってしまうことがあります。私が勤めている会社の顧客には、国とか自治体、企業、一般家庭などがありますが、顧客との接点は、基本的には販売店ですが、今ではコンピュータを開くとそこに店があるという時代になりました。したがって、最近のマーケティングの言い方はマネージャールマーケティング、つまり経営戦略そのものだという人もいます。

顧客について数点お話しします。第一点は顧客との関係づくりを大切のすること。二点目は、顧客を選ぶという考え方には基本的には立つべきである。そのためには、どういう価値を提供できるかという事です。三点目は、商品の概念、コンテンツが大切なことだと考えております。また、顧客満足という点で言えば、「ブランド」というのが非常に重要なキーワードになります。商品で見ていると、例えば機能・性能等様々な要素でブランドが成り立っていますが、その商品名だけでそのものが思いつかべることができる。そうしたブランドというものを作るといのは大事な事です。ブランドの

高い商品は、お客さんから見ると付加価値が高い商品となります。また、企業側から言えば「ブランドは資産」となるのです。逆に、顧客はブランドスイッチを頻繁に起こしますので、ブランドスイッチしない商品を顧客に提供しなければなりません。ブランドスイッチしない理由は、気に入っているという事です。そのためには、例えば、クレーム処理を活かして次の商品開発に活かす。クレームの中にビジネスチャンスがあるわけです。競争をしている家電業界において、「指名買いにつながる競争優位を実現する戦略的課題」を探ることが大切です。「顧客のファン化」とは、「同じ消費者から継続的に購買してもらうこと、つまり、リピート購買していただくこと」と定義しておりますが、家電業界の分析の一端を博物館に置き換え、それぞれの立場でかみ砕いてご活用いただければ幸いです。

●お願い

会費未納入の方、すみやかに納入のほどよろしくお願いいたします。

(事務局)

北海道青少年科学館職員研修会報告

北海道青少年科学館連絡協議会

事務局 荒井久和氏

平成九年度の北海道青少年科学館職員研修会が、十月十六日・十七日の二

日間の日程で、厚岸町海事記念館で開催しました。

本研修会は、北海道青少年科学館連絡協議会に参加する理工系科学館職員を対象に、毎年一回行われているもので、今回は道内各地から十一館十七名が参加した。他館との情報交換をメインにおき、各館からの情報や意見などの発表がありました。

一日目の午前中は、開会にあたり厚岸町教育委員会



教育長小野寺英樹氏より挨拶がありました。実技研修とい

うことで、木とアクリ板を使ったフォトスタンド造りに挑戦しました。この実習では、やや時間オーバーしたものの、全員が各自のオリジナルティを發揮し、それぞれ個性的なフォトスタンドを作ることが出来たようでした。

午後からは、当館二階のプラネタリウム室においてプラネタリウムの保守点検を仕事としている、青木氏による講演「プラネタリウムに関して」と題してプラネタリウムに関する実用的な点検の仕方などを実演を交えて講演が行われた。その後、休憩をはさみ情報交換会に移り、昨年と同じテーマで「簡単にわかりやすくおもしろい実験工作」というテーマで、「消しゴムを作ろう」(旭川)、「光スライム」(不思議なプラスチック) (小樽)、「ムカデロボット」(帯広)、「手作り電池で遊ぼう」(釧路)、「あつたかカイロづくり」(かざぐるま)「飛行塔」

(札幌)、「なかよしシャトル」(苫小牧)、「人工雪製作」(オホーツク流水センター)等の報告があった。

二つ目のテーマは、これも昨年と同じで「各館の特別展・企画展について」でしたが、時間の都合により各館からの発表が出来なかつたので、この紙面をお借りして発表させていただきます。まず、全国科学館連絡協議会巡回展「科学のスポーツ広場」「科学遊園」が旭川市と室蘭市での開催、旭川市では、さらに、「子供

のためのわくわくサイエンス」と題して米村傳治郎氏の公開講座が企画されていました。また、他の各館においても様々な団体や関係する国の機関

や大学などの協力を得ながら、いろいろな企画展を開催しているのが、良く理解できるように記載されていました。ただ、ほとんどの館で予算確保が難しいなか、これだけの事業展開をしている苦労が見受けられました。

二日目は、厚岸の社会教育施設等の見学を行った。まず、厚岸町郷土館、国指定史跡「国泰寺跡」、国指定重要文化財「正行寺本堂」、厚岸水鳥観察館などを熱心に見学していた。

学芸職員部会研修会に参加して

俱知安町教育委員会

岡崎克則氏

平成九年度の学芸職員研修会が「地域学のススめ道南博物誌」の主題の下に、九月二十五・二十六日にわたって函館で行われた。初日は、

と歴史から見た北海道」のテーマでシンポジウムが行われ、地質・動植物・先史・中世・近世の専門家が自らの具体的な接点から道南について概観した。翌二十六日の午前中は市立函館博物館にお邪魔をし、施設をつぶさに見学すると共に、施設の抱える問題点について長谷部学芸員から直接に伺う機会を持った。

初日のシンポジウムにおいて、今金町教育委員会の能條歩氏は、三億年前から約二万年前までの道南の地質の変遷を要約し、古い時代から新しい時代までの地層が豊富に見られる点を強調された。

七飯町役場の田中正彦氏は、道南での鳥類の標識調査の現状と成果について発表して下さった。放したツバメが四ヶ月後にインドネシアで捕獲されたなどの成果はあったらしいが、万に一つの幸運に望みを託した地道な調査である。本当に頭が下がる思いであった。

函館山ふれあいセンターでは函館山を舞台に環境教育の



目的で観察会を開催している。自然観察指導員の木村マサ子さんは、これまでの活動の経過を、御自身が作られた函館山の模型までも用いて説明して下さった。現場で問題を解決してきた迫力と説得力にあふれた内容で、今回のシンポジウムの白眉だと感じたのは私だけではなかったであろう。

青森県立郷土館の福田友之氏は「縄文時代の青函交流」と題して、縄文時代の本州北部と北海道の交流の証拠を紹介された。加えて福田氏は、

日本海と太平洋の交流をも含めた十字交流の場として津軽海峡の重要性を指摘された。

「上ノ国の中世」と題した講演の中で、上ノ国町教育委員会の松崎水穂氏は、出土陶磁器の情報に基づく、上ノ国の勝山館が北海道の日本海側を北上するルートの拠点だと推測できる旨を述べられた。

函館市教育委員会の田原良信氏は、豊富なスライドを使って五稜郭と函館奉行所について紹介して下さった。発掘の結果、実に豊富な出土品が得られている由であるが、函館戦争時について想定される轍が非常に印象的であった。

翌26日の午前中は市立函館博物館にお邪魔をし、長谷部・霜村両学芸員から施設の抱える問題点について伺った上で、しっかりと見学させていただいた。折しも北海道教育大学函館分校の学生さんたちが博物館実習でつくった特別展示が開催されていた。手作りの魅力にあふれ、作成時の過程を逆によく想像できるような展示であった。



ここ数年の趨勢として、研究会では生涯学習のつながりから博物館の機能が語られることが続いた。確かに、生涯学習時代に施設をどう使って貰うかということは非常に重要な点である。しかしながら、生涯学習という抽象概念を明確に定義せず、お仕着せで実り薄い論議を重ねることに欲求不満を抱いていた私にとっては、今回のシンポジウムの内容はなかなか聞き応えのあるものであった。まずは研修会のテーマを流行の生涯学習から地域学に据え換えた主催者側の判断を高く評価したい。

地域学については一九九四年に上士幌町で行われた研修会で大きく取り扱われた後、暫く論議されていない。博物館というのはその役割が実にさまざまな分野と関わりを持つ施設である。地域学はその関わりの中の一分野に過ぎないかも知れないが、地域の人々が自分たちの地域についてしっかりと知りたいたいと思つた場合、どこがその要望に応えてくれるのであろうか。地域の情報を掘り起こし、しっかりと評価する地域学を踏まえ、博物館を置いて他には無いだろう。ここにこそ博物館の存在の意義があるように思う。

今回のシンポジウムで道南の地域学が網羅されたとはとても言いがたい。しかし道南が北海道で特異な地域であることをはっきりと提示できていたので、少なくとも最初の目的は達成できたのではなからうか。大切なことは、このような取り組みを積み重ねてゆくことで、道内の各地方の情報の蓄積と活用が進展して行くことを切に願っている。

新館・園の紹介

札幌大学埋蔵文化財展示室

札幌大学埋蔵文化財展示室（以下「展示室」）は、一九八九年四月一日にオープンした大学付属の考古学博物館です。中央棟（通称研究棟）が落成した折に、旧施設の再利用計画の一つとして新設された本学初の博物館施設です。

「展示室」は、キャンパスの東南隅、五号館に位置しています。その一階全体を占める施設は、主展示室（六三平方m）、整理室（八八・五平方m）、収蔵庫（一一七平方m）、資料室、暗室、事務室などからなります。総面積わずか四五〇・六平方mですが、博物館と呼ぶにはいくらか躊躇のある規模のとても小さな施設です。発展途次にある博物館と理解していただくのがふさわしいでしょう。

資料で飾られています。各時代にわたって網羅された資料は、およそ時代順に配列・展示されています。また関連して、海外の貴重な資料も添えられています。これら展示品は、主に札幌大学開学以来のおよそ三〇年にわたり北海道内、あるいは海外で発掘・収集されてきた資料によって基礎づけられています。主な展示品をあげると、次のとおりです。

◆縄文時代コーナー 湧別市川遺跡出土の石刃鎌文化の遺物、恵庭柏木B遺跡環状土籬（かんじょうどり）出土の堂林式土器・石棒・ヒスイ製小玉・石斧・石鏃・漆塗り弓など、コンドン遺跡（ロシア）発見の土偶（複製）、ヴォズネセノスカ遺跡（ロシア）発見の面付き土器（複製）

◆縄文時代コーナー 石狩紅葉山三三三号遺跡出土の恵山式土器・石製ナイフ・石鏃・石斧・管玉など恵庭柏木B遺跡出土の後北C・D式土器・北大式土器・ガラス製小玉

◆擦文時代/オホーツク文化コーナー 恵庭カンリンバ3遺跡出土の土師器、天塩川口基線遺跡出土の擦文式土器、斜里ウトロ発見のオホーツク式土器・骨製装身具

◆その他のコーナー ジャルモ・ウル（イラク）など西アジア発見の遺跡

なお、一九六七年札幌大学の開学以来活動してきた文化交流特別研究所（江上波夫所長）は、「展示室」の発足にともない発展的に解消され、それまで研究所によって集められた資料が展示室に引き継がれました。

「展示室」は、当初からの設立主旨を活かし、本学学生の教育・実習施設として提供するだけでなく、広く一般に開放しています。博物館活動は、地域との結びつきを留意しつつ進めていますが、小・中学生の見学者が多く、時に近隣の小・中学校の授業に利用されています。「展示室」では、歴史年を兼ねた「リーフレット」、「AMSUニュース」を刊行しています。

（室長・木村英明）

＜利用案内＞

●所在地 札幌市豊平区西岡三条七丁目三一

●開館日・時間 毎週水・木曜日/一〇時/一六時、土曜日/一〇時/一五時

※祝祭日・大学の休業日は除く。なお、問い合わせがあれば、休館日や閉館時間以外でも開館できる。

●入館料 無料

●交通案内 地下鉄南北線澄川駅よりバスで五分

●問い合わせ TEL〇一一八五二一一八一 FAX〇一一八三六一〇二二五



館・園のおもな事業

館園行事 二月～三月

- アイヌ民族博物館
 - 共催展「アイヌの美(装い)ー土佐林コレクションの世界」2・1/2・22
- 旭川市青少年科学館
 - 天文普及講座「CCDカメラ入門」2・22、「プラネタリウム・コンサート」3・29
- 厚岸郷土館
 - 特設展「町民寄贈資料展」3・10/3・19
- 江別市セラミックセンター
 - 「新収蔵品展」2・20/3・22、「陶芸の里コンサート」2・22
- 小樽ベネツィア美術館
 - 「カーニバル展」1・30/3・29
- 帯広百年記念館
 - 講座「八王子千人同心 蝦夷地の開拓と警備」2・21、講座「大昔のとかち 平成9年度発掘調査の成果」3・21、共催展「アイヌの美(装い)ー土佐林コレクションの世界」3・1/3・15
- 釧路市青少年科学館
 - 「女性科学教室」2・12/毎週(木)3・5
- 釧路市立博物館
 - 「湿原アドベンチャーハイク」2・1
- 栗山町開拓記念館
 - 特別展「平成八年度収蔵品展」2・3/3・1
- 札幌芸術の森
 - 「芸術の森美術館所蔵展」1・24/3・29、「第9回札幌芸術の森フォトコンテスト作品展」1・17/3・29、「み・ん・な・であそぼう芸術の森おもちやワンダーランド」1・17/3・29
- 札幌市青少年科学館
 - 特別展「ニュートンのおもしろサイエンス」3・21/4・5
- 知内町郷土資料館
 - 「春を探してみよう」3・8
- 市立函館博物館
 - 講座「ひな人形をつくろう」2・22
- 名寄市北国博物館
 - 特別展「庄内と民具」2・7/3・1、企画展「新着資料展」3・10/3・22
- 登別市郷土資料館
 - 「三世代ひな人形展」2・7/3・3
- 函館市北方民族資料館
 - 講座「ムツクリをならそう」3・7
- 美唄市郷土史料館
 - 開放事業「ちぎり絵展」2・14/2・28
- 美幌博物館
 - 企画展「冬季作品展」2・8/3・8、企画展「写真で綴る美幌一〇年の歩み」3・21/5月中旬
- 北海道開拓記念館
 - 共催展「アイヌ工芸展」3・1/3・31、観察会「冬の森を歩くー動物の生活痕」2・15、観察会「親子でみる森の自然」3・15
- 北海道立旭川美術館
 - 特別展「アミューズランド」98」2・7/3・29
- 北海道立帯広美術館
 - 「自然の中の画家たち」1・31/3・29、「20世紀の世界のポスター」12・13/3・29

事務局日誌

- 北海道立オホーツク流水科学センター
 - 写真展「オホーツクの四季」3・14/4・12
- 北海道立近代美術館
 - 特別展「棟方志功の世界」2・6/3・15
- 北海道立函館美術館
 - 特別展「道南の美術」2・7/2・22
- 北海道立文学館
 - 企画展「母と子の文学のつどい」3・14/3・28
- 北海道立北方民族博物館
 - 講習会「イーグルづくり」2・1、講習会「とんぼ玉づくり」2・15
- 北海道立オホーツク流水科学センター
 - 会開催(於 開拓記念館) 10・9 平成九年度ミュージアム・マネージメント研修会開催要項送付
- 北海道立近代美術館
 - 彰応募要領等の送付 10・16 平成十年度道博協表会開催要項送付
- 北海道立函館美術館
 - 10・21 平成九年度ミュージアム・マネージメント研修会講師依頼
- 北海道立文学館
 - 10・28 道博協役員就任承諾書受領(福士廣志理事)
- 北海道立北方民族博物館
 - 10・31 平成九年度ミュージアム・マネージメント研修会補助金等交付通知
- 北海道立旭川美術館
 - 11・5 道博協事業担当理事会開催案内送付
- 北海道立帯広美術館
 - 11・18 道博協事業担当理事会開催(於 開拓記念館)
- 北海道立旭川美術館
 - 11・21 北海道教育委員会教育長との意見交換(於 道庁別館)
- 北海道立帯広美術館
 - 11・28 平成九年度第三回役員会開催(於 開拓記念館)
- 北海道立旭川美術館
 - 12・13 第三六回北海道博物館大会報告書送付
- 北海道立帯広美術館
 - 1・30 平成九年度社会教育関係団体等連絡協議会会議(事務局長出席)